

イカしたヒーローが召喚されました。

烏賊焼き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

カルデアに召喚されてしまった3号の話

## 目次

イカしたヒーローが召喚されました。	1
真名『3号』	4
金イクラを集めるだけの簡単なバイトです	8

イカしたヒーローが召喚されました。

人理継続保障機関フィニス・カルデアーその頭脳ともいべき職員たちは頭を抱えていた。人理修復という途方もない目標、その道のりを歩む中で『想定外は常に起こりうる』ということを嫌というほど学んだはずの彼らでさえ、今回のことは脳が対処しきれなかったようだ。

「ダヴィンチちゃん…僕にはこの塩基配列が今の地球上には存在しないものであることがわかったよ…」

疲れ切った顔でそう零したロマニに対し、ダ・ヴィンチは深いため息と共に答えた。

「現在の生物で最も近いのは『おそらく』イカ『だろう』。この天才をして断定しきれないとはね。人間とサルを超える遺伝子の差がある。…それにしても進化が余りにも急激すぎるな。進化を誘発させるような恐ろしい環境の激変が起こったのだろうか。少なくとも彼女らがいる頃の人間は地上の覇者ではなさそうなことは確かだ。」

いや、ヒトを見たときの反応からするに人類はもうー

ダ・ヴィンチはその言葉を飲み込んだ。ただでさえ非常事態なのに、これ以上追い詰めるべきではない。

「現在キャスターたちが彼女の言葉を翻訳しようと頑張ってくれている。少しずつだが翻訳システムも完成に近づいているそうだ。完成した暁には直接話を聞けるはずさ。」

二人はモニターの一つに目を向けた。そこに映っているのは、現在のカルデアの大混乱の原因といってもいいだろう存在。

— どういうわけかカルデアの召喚システムに呼び寄せられてしまった、人間ではない『少女』だった。

時は遡り1日前。カルデアに英霊を呼び出す儀式を行うための部屋、通称召喚の間には人類最後のマスター、藤丸立香とデミ・サーヴァ

ントのマシユ・キリエライトが訪れていた。

「今度はどんな人が来てくれるかな？」

「言葉が通じる人だといいですけど…」

気さくに話しかけた立香に対し心配そうな声を返すマシユ。その言葉に立香は少し困ったような笑顔を向けた。マシユの言う通り。一口に英霊といっても様々な人がおり、特にバーサーカーのクラスにはマシユの言う言葉が通じない英霊も多い。

しかし、立香は召喚が好きだった。人類史に残る英雄たちに会えるからというのももちろんあるが、最も好きなのところは様々な人と出会うことができるところだ。たくさんの人が、それぞれのかけがえのない記憶をもって召喚に応じてくれる。そして交流していくうちに、その人のことが少しずつ分かっていく。そのことがとても楽しかった。

『いいよ立香君、始めてくれ！』

「先輩、頑張ってください！」

別の場所からダ・ヴィンチと一緒に召喚を見守るロマニの言葉で、1つ1つがとてつもない量の魔力の塊である聖晶石を3つ召喚サークルに乗せる。立香が召喚の態勢に入ると、聖晶石が砕け強烈な光が辺りを照らす。その光はやがて収束し、召喚サークルの上で回転しながら形を作っていく。そして光が一際強くなった後、そこには新たなサーヴァントがいた。

「…え…？」

どんな英霊が召喚されるのか、楽しみにしていた立香ですら反応しきれなかった。

そこにいたのは人間の形をした、しかしながら確実に人間ではない存在だった。

体に対してずいぶん大きな頭と爪のない手。

目の周りに入ったまるで隈のような黒い模様。

そして何より人間でいうところの髪に相当する部分にある吸盤付きのゲソ。

「……#&#@%%&@&#…？」

ようやく衝撃から立ち直りかけた立香たちに放たれたその言葉は、

立夏たちには伝わらず、―そして混乱に叩き落した。おかしい、聖杯の力によって言葉は通じるはず…そう考えて固まる立香たちをよそにその新しいサーヴァントは立香たちに近寄ってきた。そして想像より強い力で腕をとられ、何かを確認するようにいじられる。

「@%&#%#%#&#@…!:@&#\$\$##\$#@%&@&&#%&!!」

「え、えっと、あのく…」

何やら感動している様子のサーヴァントにようやく復帰した立香が話しかけると。サーヴァントはまるでハツと何かに気づいたように離れ、またよくわからない言葉をまくしたて始める。

「#&#@%#&@&#、#@&@&@&。#%@\$@#%…!@&@#\$\$##\$%\$#@#。%\$\$%\$@%&%!!」

「よ、よろしく!!」

最後の言葉と共に行われた両手の甲を見せるような動作は決めポーズ的な何かだと気づいた立夏は、とりあえずマネしてみた。彼女の嬉しそうな笑顔から察するに正解だったらしい。

―この謎のサーヴァントを巡り、カルデアが大混乱に叩き込まれるまであと少し―

## 真名『3号』

【出典】??

【CLASS】アーチャー

【真名】3号

【性別】女

【身長・体重】??

【属性】中立・善

【ステータス】筋力B＋ 耐久C－ 敏捷A 魔力E－ 幸運B

宝具B

インクリングという人間が滅亡した後に台頭した生命体の一人。ハイカラシテイという町に田舎から上京してきた若者。その後成り行きでハイカラシテイを守るNewカラストンビ隊に入隊し、タコの軍団オクタリアンとオオデンチナマズを巡って戦った。彼女はそんな3号たちを集合させた存在らしい。人類滅亡後の存在であるため知名度補正は一切かからない。

そもそも人類滅亡後の世界に住む彼女がなぜ召喚されてしまったのかは謎が多い。カルデアの召喚システムの不安定さが引き起こした奇跡といっても差し支えないだろう。

保有スキル

『スペシャルインク』 B

彼女たちの種族『インクリング』の興奮すると大量のインクを生成するという特徴を表したスキル。魔力を消費することでこの状態に素早くシフトすることができる。3号は大抵のスペシャルを扱えるため、非常に強力なスキルとなっている。

インクリングの“より大きく、より広く自分のインクで周りを染め上げたい”という欲求が満たされたときにこの状態になることが多い、この特徴を利用する手段として膨大なインクを消費するスペシャルウエポンが考案されたらしい。

#### 『スーパージャンプ』 C

インクリングが日常的にバトルで使っている動作、味方やリスボン、ビーコンといった対象に向かっての高く速いジャンプを基にしたスキル。

認識できる味方が居れば短時間でそこまで移動することができて便利だが、着地点に予告のマーカーが出現するので使いどころには気を配る必要がある。

#### 『シオカラ節のグルーヴ』 A

インクリングの本能に刻み込まれているといっても過言ではない曲『シオカラ節』、その曲の音色を聞いたイカたちの冷め止まない興奮を表すスキル。

シオカラ節の曲が流れている間、すべてのステータスが底上げされる。音楽魔術の使い手が3号のためだけを思って編曲すれば、スペシャルを使い続けなければインクの消費が追いつかないほどの興奮状態にすることもたやすいだろう。

#### 『戦場の心得』 B

かつての英雄、アタリメ指令から学んだ戦場での在り方を示すスキル。繊細かつ大胆な行動、インクリング特有の特殊な動きなどが挙げられる。

その動きのある種極めたといってもいい彼女は『スライドするかのようにその場から移動する』という技術を身に着け、一部のイカやタコからずるいという声が上がっているとかないとか。

#### 『単独行動』 A



彼女の一人で戦場に立ちオクタリアンと戦った様から与えられたスキル。彼女自身の魔力消費の少なさも相まって魔力の供給がなくとも多少の期間なら一人で行動することができる。とは言っても彼女は本当に一人だったわけではなく、通信越しとはいえ彼女を見守ってくれている人も居た。

## 宝具

『英雄のためのインク銃』 C +

彼女が愛用しているブキ。長い射程と高い攻撃力を併せ持つ。サブとしてほかの物体との接触回数や時間で爆発するインクの爆弾『スプラッシュボム』を備えている。

彼女のインクは特殊な魔力を帯びている。特徴としては一度に大量のインクを浴びたり、少量でも浴び続けたりした対象を消耗させ、場合によってはサーヴァントや魔獣などには霊核の破壊、人間などには一定時間の気絶を引き起こす。インクに含まれている魔力は時間を置くと徐々に薄くなり、最終的にはインクと共に消失する。

『同色の者の復活地点』 B

よほどのことがない限り死ぬことがないインクリングが、戦いの際に復活地点として利用していた道具。常にインクで満たされており、幽霊のような状態になった3号がここに浸かることで復活することができる。また、彼女が味方だと認めた存在が近くにいる場合、微量ながらその者の魔力を回復させる効果を持つ。これが破壊されたなどの理由で使えなくなった場合には他のサーヴァントと同じようにフェイトシステム経由で復活することになる。

『スプラトウーンズ・スペシャルウェポン  
『始まりの日々の全力兵器』 B

流行の中心地がハイカラシティだった頃のダイオウイカやトルネードなどの強力なスペシャルを放つことができるようになる。真名解放後に使えるのは一つだけであり、数あるスペシャルの中から選

択する必要がある。相手の霊核を一撃で破壊しうる強力なものが多い反面、魔力の消費量が多いため乱発はできない。

## 金イクラを集めるだけの簡単なバイトです

カルデアのキャスターたちが誇りと威信をかけて作った翻訳プログラムは無事完成し、カルデア中の注目の的だった3号の放った”ニンゲンは1万2千年前の地層から化石が見つかった絶滅動物”という言葉でカルデアが再び大騒ぎになってから、それなりに時間が過ぎた。3号は立派なカルデアの一員として真面目に働いていた。

「マスターおはよー！今日は何するの？」

「おはようイカちゃん。今日はようやくちよつと余裕が出てきたから、イカちゃんにも召喚を体験してもらおうつもりだよ」

「やったー！」

ぴよんぴよんとかわいらしい擬音が聞こえてきそうなジャンプをしながら全身で喜びを表現する3号を連れて、立香は召喚サークルへやってきた。

『いいよ立香君、始めてくれ！』

「了解！」

ロマニの言葉で、聖晶石を3つ召喚サークルに乗せる。立香と隣で立香の真似をするイカちゃんが召喚の態勢に入ると、聖晶石が砕けて発生した強烈な光が発生した。光を見ながら文字通り目を輝かせるイカちゃんの声をBGMに光はやがて収束し、召喚サークルの上で回転しながら形を作っていく。そして光が一際強くなった後、そこには新たなサーヴァントがいた。

「え…？」

『嘘…』

驚愕に言葉を失う立香たちに不思議そうな顔をした後、”もう一人の”インクリングが声をかけた。

「Newカラストンビ部隊 4号つす！よろしくお願いまーす！」

—————

3号という前例があったこと、翻訳プログラムが存在していたこと、そして何よりインクリング特有の享乐的な性格が前面に出ていることもあり4号はすんなりとカルデアに馴染んだ。そんな4号は今、

とある要望をロマニに叩きつけていた。

「バイトかあ…」

「そう！シャケをシバいてイクラを集めるめっちゃ楽しいバイトっす！」

その後も怪しさ満点の宣伝文句をつらつらと並べ立てる4号を見ながらロマニは考える。同種が存在が現れたことで戦闘本能が刺激されたのか、ここ最近の3号と4号はシミュレーターに足しげく通っていた。いわばある種の欲求不満な状態のようだ。ロマニは知らないが、インクリングはナワバリバトルというスポーツに100年前のものとは言え14式竹筒銃という実際につかわれた兵器を持ち込むほど好戦的な種族であるのだ。しばらく腕を組んで考えた後、よしと言つてロマニは答えた。

「シミュレーターを使えば再現くらいはできるかもしれないね。ちよつと試してみようか」

「いいんすかーやったー！」

試すと言つただけなのに喜びを全身で表す4号に苦笑しながら、4号とロマニはシミュレーターに向かった。

—————

4号がもたらしたサーモンランは電力・魔力資源が無限に欲しいと言つても過言ではないカルデアに革命をもたらしした。それが良いものか悪いものかをいったん置いておいてとにかく革命をもたらしした。サーモンランをやることで集められる金イクラと呼ばれる物体。中で小さな魚が泳いでいる金色の巨大なイクラという何とも言えないこの物体が、石油などと同じようなエネルギー資源として非常に有用であったからだ。電力を使って魔力をつくっているカルデアでは手取り早く燃料を調達できるこのバイトは渡りに船だったのである。3号と4号のストレス発散という本来の目的と合わせて、新たな資源確保の場としてサーモンランはカルデア内で大きな存在感を示すこととなった。

しかしながらサーモンランには非常に困った仕様があった。1つ目はサーモンランの内部においてはクラスに関係なく魔力をインク

に非常に効率よく変換できること。2つ目はシヤケはインク以外では基本的に倒せないことである。いや、可能ではあるのだ。魔力をふんだんに使って魔術や身体能力の底上げで倒すことには倒せる。しかし、サーモンランの目的は金イクラ、すなわち電力として魔力リソースを回収することであるので、当然回収した金イクラと使用した魔力を天秤にかけて金イクラの方が上回っている必要がある。そうになると固いウロコに覆われていてシンプルな物理攻撃よりもインクを使った攻撃の方が簡単に倒せるシヤケには、できるだけインクショットで倒した方がいいとなる。フライパンでぶん殴ってくるならまだかわいいもの、インクとはいえ爆弾やミサイルを使って攻撃してくる超好戦的な種族あいてに慣れないインク武器を使って戦わされることについて、カルデアの面々は以下のように零している。

「セイバーの私にリッターを渡す意味が分かりません」

「アーチャーの俺になぜボールドを持たせた」

「ランサーの俺にはヒツセンとか無理だから」

「エクソロといいハイドラといいやたら目立って強い武器をなぜアサシンに配るのかな」

「あの、シエルターこそシールダーに…」

しかし資源を回収するにはなれない武器で頑張って、凶暴なシヤケをシバいてシバいてシバき尽くすしかないのだ。今日もカルデアでは専用の装備に身を包んだ何人かのサーヴァントがサーモンランに消えていった。

——もう一人3号を名乗るイカがコジヤケを連れて現れ、N

EXT WAVEが始まるのはまた別の話。